

第1世代に学ぶ GT-R道

ハコスカ CLUB

今から約50年前に誕生したハコスカを現代の路上でも安心して走らせたい。そんなオーナーの思いを叶えるショップが東京都国分寺市にある『オートクラフト』。同社が施す旧車の現代風リメイクを取材した

文：山崎真一（本誌）／写真：小林 健（本誌）



旧車のぼやとした光ではなくハッキリ明るい。バックランプ、ポジションが別々に点灯するので視認性も高い



オリジナルの雰囲気を壊さない仕上げも旧車の世界では大切



サンプルとして用意いただいた上質コンディションのKPGC10。一見するとオリジナル度は高いが、エアコン、パワステ、クラッチブースターを装着し、現在の道路事情に対応する扱いやすさと快適性をプラス。バッテリーをトランクに移設したのは熱の影響で起こる劣化を防ぐためだ。エアコンはアメリカ製と国産のハイブリッドだ！



オートクラフト 発

旧車を現役で走らせる 配線職人の拘りの妙義

ハーネスはリプロ品より新規で作った方が効果大

メンテナンスやレストアを謳うショップは全国に多くあるが、配線修理を前面に打ち出すのは「オートクラフト」以外に見たことがない。

ホームページの「ヒストリックカーを、骨董品としてではなく、現代の路上を現役で走らせたい。そんなお客さまのお力になります」という一文はプロショップとしての気概と自負を伝えている気がした。では、旧車の代名詞であるハコスカを無理なく、現役で走らせるためにはどのようなリメイクが必要なのか？

「ハコスカが現役のころは夏熱いといえは30℃程度でしたが、現代の夏の温度は軽く体温を超えます。こうなるとクーラーがないクルマは耐えられない。となると、装着して欲しいとなるのですが、旧車にそのまま付けるとやれオーバーヒートだ、電気が足りないだと多くの弊害が起る可能性が高まります。エアコンの設定のないクルマに装着すれば、当然起こりえることですよね」

クーラーを付ける場合には、必然的に電動ファンが必要で、それにもない電気消費量が大きくなる。対策として大容量オルタネーターを装着して発電量を高めるのだが、配線も新たにそれに合わせた電気の通り道を作ってやらないと意味がない。ましてや経年劣化が進んだ純正配線をそのまま使うのはさらに危険だ。

「だからハーネスは作り替え、回路は独立。老体にエアコンという重い荷物を持たせるわけですから、可能な限り負担を掛けないように細工し、健康な状態にしてやるのが大切です。また、こうすることで、絶版の可能性が高い純正スイッチの接点に負荷を掛けず、壊れる可能性も減らせます。また、ウインカー類のLED化は消費電力軽減に効果的です」

旧車の調子悪さは配線の劣化が原因であることも多い。ライトが点灯するから電気は大丈夫ではなく、各部に規定値の電圧が流れているかを確認する必要があります。上流電源の配線を一新し、部品を新品に交換するだけで、愛車の元気を取り戻せる。配線の点検なら自分でもできるので、挑戦してはいかがだろうか。

「こうした現代風のリメイクを施すためには配線類、エアコン部品は海外製に頼るしかありません。クルマを直して乗る文化が未発達な日本ではこうした部品を調達するには限界があります。海外は種類が多く、常に進化していますから、いつも目を光らせていますよ」と浅沼代表。

また、リメイクの拘りはオリジナルのスタイルを損なわないこと。「旧車はすべて元に戻せるようにボディ側には改造はしません。手を加える場合もその存在を隠し、違和感が出ないように仕上げます。使わないスイッチは別の機能を持たせ、利便性を高めるなど工夫しています」



「電気がわからないとクルマは触れません」と浅沼代表

ちなみに、ワンオフ設計となるエアコン装着と配線の見直しは製作に半年から10カ月、予算は最低3桁必要となるが、快適な旧車ライフを過ごせると考えるなら高くはない。「その時代で最高のシステムを提供します」という浅沼代表。2年間保証がその言葉の裏付けだ。